総合型選抜入学試験

二〇二六年度　総合型選抜入学試験
藤女子大学文学部　日本語・日本文学科

●次のタイプ1・2のいずれかを選んで課題文を作成し、提出してください。
●課題文には表紙を付け、選択したタイプ・氏名・課題文のタイトル・総字数をそれぞれ記してください。課題文のタイトルは、タイプ1の場合は「〈見ること〉をめぐる物語」とし、タイプ2の場合は（1）『徒然草』と書き、（2）は取り上げる話題（テーマ）を書いてから、課題の文章を書いてください。

タイプ1

【課題】

次の文章は、芥川龍之介「春の夜」（一九二六年）と堀辰雄「窓」（一九三〇年）です。これら二編の短編をよく読み、作品世界を理解した上で、〈見ること〉をめぐる物語を二〇〇〇字から四〇〇〇字程度で自由に創作しなさい。二作品と関わりのある物語でも、新たに創造した物語でも可とします。

芥川龍之介「春の夜」

これは近頃Nさんと云う看護婦に聞いた話である。Nさんは中々利かぬ気らしい。いつも乾いた唇のかげに鋭い犬歯の見える人である。

僕は当時僕の弟の転地先の宿屋の二階に大腸加答児を起して横になっていた。下痢は一週間たってもとまる気色は無い。そこで元来は弟のためにそこに来ていたNさんに厄介をかけることになったのである。

ある五月雨のふり続いた午後、Nさんは雪平（1）に粥を煮ながら、いかにも無造作にその話をした。

×　　×　　×

ある年の春、Nさんはある看護婦会から牛込（2）の野田と云う家へ行くことになった。野田と云う家には男主人はいない。切り髪（3）にした女隠居が一人、嫁入り前の娘が一人、そのまた娘の弟が一人、――あとは女中のいるばかりである。Nさんはこの家へ行った時、何か妙に気の滅入るのを感じた。それは一つには姉も弟も肺結核に罹っていたためであろう。けれどもまた一つには四畳半の離れの抱えこんだ、飛び石一つ打ってない庭に木賊（4）ばかり茂っていたためである。実際その夥しい木賊はNさんの言葉に従えば、「胡麻竹（5）を打った濡れ縁さえ突き上げるように」茂っていた。

女隠居は娘を雪さんと呼び、息子だけは清太郎と呼び捨てにしていた。雪さんは気の勝った女だったと見え、熱の高低を計るのにさえ、Nさんの見たのでは承知せずに一々検温器を透かして見たそうである。清太郎は雪さんとは反対にNさんに世話を焼かせたことはない。何でも言うなりになるばかりか、Nさんにものを言う時には顔を赤めたりするくらいである。女隠居はこう云う清太郎よりも雪さんを大事にしていたらしい。その癖病気の重いのは雪さんよりもむしろ清太郎だった。

「あたしはそんな意気地なしに育てた覚えはないんだがね。」

女隠居は離れへ来る度に（清太郎は離れに床に就いていた）いつもつけつけと口小言を言った。が、二十一になる清太郎は滅多に口答えもしたこともない。ただ仰向けになったまま、たいていはじっと目を閉じている。そのまた顔も透きとおるように白い。Nさんは氷嚢を取り換えながら、時々その頬のあたりに庭一ぱいの木賊の影が映るように感じたと云うことである。

ある晩の十時前に、Nさんはこの家から二三町離れた、灯の多い町へ氷を買いに行った。その帰りに人通りの少ない屋敷続きの登り坂へかかると、誰か一人ぶらさがるように後ろからNさんに抱きついたものがある。Nさんは勿論びっくりした。が、その上にも驚いたことには思わずたじたじとなりながら、肩越しに相手をふり返ると、闇の中にもちらりと見えた顔が清太郎と少しも変らないことである。いや、変らないのは顔ばかりではない。五分刈に刈った頭でも、紺飛白らしい着物でも、ほとんど清太郎とそっくりである。しかしおとといも喀血した患者の清太郎が出て来るはずはない。況やそんな真似をしたりするはずはない。

「姐さん、お金をおくれよう。」

その少年はやはり抱きついたまま、甘えるようにこう声をかけた。その声もまた不思議にも清太郎の声ではないかと思うくらいである。気丈なNさんは左の手にしっかり相手の手

を抑えながら、「何です、失礼な。あたしはこの屋敷のものですから、そんなことをおしなさると、門番の爺やさんを呼びますよ」と言った。

けれども相手は不相変「お金をおくれよう」を繰り返している。Nさんはじりじり引き戻されながら、もう一度この少年をふり返った。今度もまた相手の目鼻立ちは確かに「はにかみや」の清太郎である。Nさんは急に無気味になり、抑えていた手を緩めずに出来るだけ大きい声を出した。

「爺やさん、来て下さい！」

相手はNさんの声と一しょに、抑えられていた手を振りもぎろうとした。同時にまたNさんも左の手を離した。それから相手がよろよろする間に一生懸命に走り出した。

Nさんは息を切らせながら、（後になって気がついて見ると、風呂敷に包んだ何斤（6）かの氷をしっかり胸に当てていたそうである。）野田の家の玄関へ走りこんだ。家の中は勿論ひっそりしている。Nさんは茶の間へ顔を出しながら、夕刊をひろげていた女隠居にちょっと間の悪い思いをした。

「Nさん、あなた、どうなすった？」

女隠居はNさんを見ると、ほとんど詰じるようにこう言った。それは何もけたたましい足音に驚いたためばかりではない。実際またNさんは笑ってはいても、体の震えるのは止まらなかったからである。

「いえ、今そこの坂へ来ると、いたずらをした人があったものですから、……」

「あなたに？」

「ええ、後からかじりついて、『姐さん、お金をおくれよう』って言って、……」

「ああ、そう言えばこの界隈には小堀とか云う不良少年があってね、……」

すると次の間から声をかけたのはやはり床についている雪さんである。しかもそれはNさんには勿論、女隠居にも意外だったらしい、妙に険のある言葉だった。

「お母様、少し静かにして頂戴。」

Nさんはこう云う雪さんの言葉に軽い反感――と云うよりもむしろ侮蔑を感じながら、その機会に茶の間を立って行った。が、清太郎に似た不良少年の顔は未だに目の前に残っている。いや、不良少年の顔ではない。ただどこか輪郭のぼやけた清太郎自身の顔である。

五分ばかりたった後、Nさんはまた濡れ縁をまわり、離れへ氷嚢を運んで行った。清太郎はそこにいないかも知れない、少くとも死んでいるのではないか？――そんな気もNさんにはしないではなかった。が、離れへ行って見ると、清太郎は薄暗い電燈の下に静かにひとり眠っている。顔もまた不相変透きとおるように白い。ちょうど庭に一ぱいに伸びた木賊の影の映っているように。

「氷嚢をお取り換え致しましょう。」

Nさんはこう言いかけながら、後ろが気になってならなかった。

× × ×

僕はこの話の終った時、Nさんの顔を眺めたまま多少悪意のある言葉を出した。

「清太郎？――ですね。あなたはその人が好きだったんでしょう？」

「ええ、好きでございました。」

Nさんは僕の予想したよりも遥かにさっぱりと返事をした。

注

（1）在原行平が潮を汲んで塩を焼いたという話から、把手・蓋・注口のある平鍋。

（2）東京都新宿区の北西部。

（3）女性の髪結い方で、髷の端を短く切りそろえ、紐などで束ねたもの。

（4）常緑多年草。

（5）クロチクの一種。

（6）一斤は六〇〇グラム。

堀辰雄「窓」

或る秋の午後、私は、小さな沼がそれを町から完全に隔離している、O夫人の別荘を訪れたのであった。

その別荘に達するには、沼のまわりを迂回している一本の小径によるほかはないので、その建物が沼に落しているその影とともに、たえず私の目の先にありながら、私はなかなかそれに達することが出来なかった。私が歩きながら何時のまにか夢見心地になっていたのは、しかしそのせいばかりではなく、見棄てられたような別荘それ自身の風変りな外見にもよ

るらしかった。というのは、その灰色の小さな建物は、どこからどこまで一面に蔦がからんでいて、その繁茂の状態から推すと、この家の窓の鎧扉は最近になって一度も開かれたことがないように見えたからである。私は、そういう家のなかに、数年前からたった一人きりで、不幸な眼疾（1）を養っているといわれる、美しい未亡人のことを、いくぶん浪漫的に、想像せずにはいられなかった。

そうして私は、私の突然の訪問と、私の携えてきた用件とが、そういう夫人の静かな生活をかき乱すだろうことを恐れたのだった。私の用件というのは、――最近、私の恩師であるA氏の遺作展覧会が催されるので、夫人の所有にかかわるところの氏の晩年の作品の一つを是非とも出品して貰おうがためであった。

その作品というのは、それが氏の個人展覧会にはじめて発表された時は、私もそれを一度見ることを得たものであるが、それは難解なものの多い晩年の作品の中でもことに難解なものであって、その「窓」というごく簡単な表題にもかかわらず、氏独特の線と色彩とによる異常なメタフォル（2）のために、そこに描かれてある対象のほとんど何物をも見分けることの出来なかった作品であった。しかしそれは、氏のもっとも自ら愛していた作品であって、その晩年私に、自分の絵を理解するための鍵はその中にある、とまで云われたとがあった。だが、何時からかその絵の所有者となっていたO夫人は、何故かそれを深く秘蔵してしまって、その後われわれの再び見る機会を得なかったものであった。そこで、私は今度の氏の遺作展覧会を口実に、それに出品してもらうことの出来ないまでも、せめて一目でもそれを見たいと思って、この別荘への訪問を思い立ったのであったが。……

私は漸くその別荘の前まで来ると、ためらいながら、そのベルを押した。

しかし家の中はしいんとしていた。このベルはあまり使われないので鳴らなくなっているのかしらと思いながら、それをためすかのように、私がもう一度それを押そうとした瞬間、扉は内側から機械仕掛で開かれるように、私の前にしずかに開かれた。

夫人に面会することにすら殆んど絶望していた私は、私の名刺を通じると、思いがけなくも容易にそれを許されたのであった。

私の案内された一室は、他のどの部屋よりも、一そう薄暗かった。

私はその部屋の中に這入って行きながら、隅の方の椅子から夫人がしずかに立ち上って私に軽く会釈するのを認めた時には、私はあやうく夫人が盲目であるのを忘れようとした位であった。それほど、夫人はこの家の中でなら、何もかも知悉していて、ほとんどわれわれと同様に振舞えるらしく見えたからである。

夫人は私に椅子の一つをすすめ、それに私の腰を下したのを知ると、ほとんど唐突と思われるくらい、A氏に関するさまざまな質問を、次から次へと私に発するのだった。

私は勿論、よろこんで自分の知っている限りのことを彼女に答えた。

のみならず、私は夫人に気に入ろうとするのあまり、夫人の質問を待とうとせずに、私だけの知っているA氏の秘密まで、いくつとなく洩らした位であった。たとえば、こういうことまでも私は夫人に話したのである。――私はA氏とともに、第何回かのフランス美術展覧会にセザンヌ（3）の絵を見に行ったことがあった。私達はしばらくその絵の前から離れられずにいたが、その時あたりに人気のないのを見すますと、いきなり氏はその絵に近づいて行って、自分の小指を唇で濡らしながら、それでもってその絵の一部をしきりに擦っていた。

私が思わずそれから不吉な予感を感じて、そっと近づいて行くと、氏はその緑色になった小指を私に見せながら、「こうでもしなければ、この色はとても盗めないよ。」と低い声でささやいたのであった。……

私はそういう話をしながら、A氏について異常な好奇心を持っているらしいこの夫人が、いつか私にも或る特別な感情を持ち出しているらしいことを見逃さなかった。

そのうちに私達の話題は、夫人の所有している氏の作品の上に落ちて行った。

私は、さっきから待ちに待っていたこの機会をすばやく捕えるが早いか、私の用件を切り出したのである。

するとそれに対して彼女の答えたことはこうであった。

「あの絵はもうA氏の絵として、世間の人々にお見せすることは出来ないのです。たとえそれをお見せしたところで、誰もそれを本物として取扱ってはくれないでしょう。何故と云いますと、あの絵はもう、それが数年前に持っていたとおりの姿を持っていないからです。」

彼女の云うことは私にはすぐ理解されなかった。私は、ことによるとこの夫人は気の毒なことにすこし気が変になっているのかも知れないと考え出した位であった。

「あなたは数年前のあの絵をよく憶えていらっしゃいますか？」と彼女が云った。

「よく憶えています。」

「それなら、あれを一度お見せさえしたら……」

夫人はしばらく何か躊躇しているように見えた。やがて彼女はいった。

「……よろしゅうございます。私はそれをあなたにお見せいたします。私はそれを私だけの

秘密として置きたかったのですけれど。——私はいま、このように眼を病んで居ります。ですから、私がまだこんなに眼の悪くなかった数年前にそれを見た時と、この絵がどんなに変っているかを、私はただ私の心で感じているのに過ぎません。私はそういう自分の感じの正確なことを信じて居りますが、あなたにそれをお見せして、一度それをあなたにも確かめていただきとうございます。」

そして夫人は、私を促すように立ち上った。私はうす暗い廊下から廊下へと、私の方がかえって眼が見えないかのように、夫人の跡について行った。

急に夫人は立ち止った。そして私は、夫人と私とがA氏の絵の前に立っていることに気づいた。その絵はどこから来るのか、不思議な、何とも云えず神秘な光線のなかに、その内廊だか、部屋だかわからないような場所の、宙に浮いているように見えた。——というよりも、文字通り、そのうす暗い場所にひらかれている唯一の「窓」であった！　そしてそれの帯びているこの世ならぬ光りは、その絵自身から発せられているもののようであった。或いはその窓をとおして一つの超自然界から這入ってくる光線のようであった。——と同時に、それはまた、私のかたわらに居る夫人のその絵に対する鋭い感受性が私の心にまで伝播してくるためのようにも思われた。

その上、私をもっと驚かせたのは、その超自然的な、光線のなかに、数年前私の見た時にはまったく気づかなかったところの、A氏の青白い顔がくっきりと浮び出していることだった。それをいま初めて発見する私の驚きかたというものはなかった。私の心臓ははげしく打った。

けれども私には、数年前のこの絵に、そういうものが描かれてあったとは、どうしても信ずることが出来なかった。

「あっ、A氏の顔が！」と私は思わず叫んだ。

「あなたにもそれがお見えになりますか？」

「ええ、確かに見えます。」

そこの薄明にいつしか慣れてきた私の眼は、その時夫人の顔の上に何ともいえぬ輝かしい色の漂ったのを認めた。

私は再び私の視線をその絵の上に移しながら、この驚くべき変化、一つの奇蹟について考え出した。それがこのように描きかえられたのでないことはこの夫人を信用すればいい。よしまた描きかえられたのにせよ、それはむしろ私達がいま見ているものの上に、更に線や色彩を加えられたものが数年前に私達が展覧会で見たものであって、それが年月の流れによって変色か何かして、その以前の下絵がおのずから現われてきたものと云わなければならない。そういう例は今までにも少くはない。例えばチントレット(4)の壁画などがそうであった。

——だが、それにしては、この絵の場合は、あまりに、日数が少なすぎる。数年の間にそのような変化が果して起り得るものかどうかは疑わしい。そうだとすると、それは丁度現在のように、夫人の驚くべき共感性によってこの絵の置かれてある唯一の距離、唯一の照明のみが、その他のいかなる距離と照明においても見ることを得ない部分を、私達に見せているのであろうか？

そういうことを考えているうちに、私にふと、A氏はかつてこの夫人を深く愛していたことがあるのではないか、そして夫人もまたそれをひそかに受け容れていたのではないか、という疑いがだんだん萌して来た。

それから私は深い感動をもって、私の前のA氏の傑作と、それに見入っているごとく思われるO夫人の病める眼とを、かわるがわる眺めたのである。

注

(1) 目の病気。

(2) 隠喩。メタファー。

(3) 二〇世紀絵画の祖と見なされるフランスの画家。

(4) ベネチア派を代表するイタリアの画家。

タイプ２

【課題】

『徒然草』について、話題（テーマ）を設定して、課題文を作ってください。

（１）まず、『徒然草』がどのような作品であるのか、学校の図書館にある書籍や国語便覧などを用いて、自分なりにまとめてください。（おおよそ五〇〇字程度）

（２）『徒然草』には、景物・僧侶・神社・教訓・和歌・無常など、さまざまな話題（テーマ）が見られます。あなたが興味を持った話題（テーマ）を二つ取り上げ、兼好の見解や考え方を踏まえて、あなた自身の所感をそれぞれ記してください。一つの章段について述べてもよいし、解答例にあるようにいくつかの章段に共通する話題（テーマ）を見つけて書いても構いません。（ひとつの話題（テーマ）につき、おおよそ一〇〇〇字程度）

【注意点】

・字数は目安です。（１）と（２）を合わせて、おおよそ二〇〇〇字から四〇〇〇字前後。
・書式は自由です。
・参考とした図書を引用する場合は、必ず、自分のことばとの差異がわかるようにしてください。（引用文を「」で括る、改行・段下げにする等）
・このレポートを書くにあたって参考とした図書などを、「参考図書一覧」「参考サイト一覧」として最後にまとめて記載してください。その際、解答例のように、書名・出版社・出版年を明記してください。Ｗｅｂサイトを利用した場合は、ＵＲＬと最終閲覧日を記してください。ただし、ウイキペディアからの引用は認めません。なお、「参考図書一覧」「参考サイト一覧」は字数に含みません。
・生成ＡＩを用いての解答の作成は認めません。

〔タイプⅠ　解答例〕

＊ここでは「創作例」ではなく、創作を始めるにあたって、課題文をどのように読み、どのように創作を膨らませていけばよいのかについて解説します。

今回は、二作品を課題文として提示しました。それぞれの課題文の作品世界と、〈見ること〉がどのように描かれているのかを考えて、創作の萌芽を見つけることが鍵となります。

一つ目の作品は、芥川龍之介「春の夜」です。物語の構造としては、「僕」がＮさんという看護婦から聞いた話を語り、最後に「僕」とＮさんのごく短い会話で閉じられるというものです。冒頭にＮさんに関する説明と「僕」との関係が説明され、物語のほとんどがＮさんから聞いた話で占められています。

では、Ｎさんから聞いた話を見て行きましょう。Ｎさんは看護婦として病気の姉弟の世話をしに行くことになりました。そこには女隠居がおり、どういうわけか彼女は、娘の雪ばかり大事にして、より病気の重い息子の清太郎には、少々辛くあたっているようです。Ｎさんから見ると、姉の雪はきつい性格ですが、対照的に弟の清太郎はＮさんに世話もかけない、少しはにかみやのおとなしい性格です。

物語は第七段落の「ある晩」の出来事から展開します。Ｎさんが氷を買いに出かけると、後ろから抱きついてくる者がいる。それだけでも驚きと恐怖を感じる出来事ですが、なんとその抱きついてきた者の顔が、Ｎさんには家で寝ているはずの清太郎に見えるのです。この者は「姐さん、お金をおくれよう。」と脅しのようなことを言ってくるのですが、Ｎさんにはその者の顔も声も清太郎そのものにしか思えません。Ｎさんは無気味に感じて爺やさんに助けを求めます。

家に戻り、Ｎさんは「清太郎はそこにいないかも知れない、少くとも死んでいるのではないか？」と思います。ですが、離れに行くと、清太郎はいつも通り寝ています。それでもＮさんには後ろから抱きつかれた余韻が残っていて、後ろを気にしています。

最後は「僕」とＮさんの会話で終わりますが、「清太郎？――ですね。あなたはその人が好きだったんでしょう？」という「僕」の問いかけにＮさんは「ええ、好きでございました。」と答えて、あっさりと物語は終わります。

読みどころは、やはり「ある晩」の出来事ですね。女性は一人で夜道を歩くという状況に、もしかしたらＮさんは少し不安な気持ちを抱いていたのかもしれません。その状況の中で、Ｎさんには抱きついてきた者が清太郎に見えました。この部分をどう解釈するかが、この物語を読み解く上で重要です。実はこの話からは、Ｎさんに抱きついた者が誰だったのかわかりません。女隠居が言うように近所の小堀という不良少年で、清太郎を慕うＮさんの目には、その不良少年が清太郎に見えてしまった、という解釈もできます。あるいは、Ｎさんは「清太郎は死んでいるのではないか」と思ったのですから、Ｎさんには抱きついてきた者が清太郎の幽霊だと思われたのかもしれません。しかし清太郎は生きていましたから、Ｎさんが見た者は幻で、現実には存在しかったのでしょうか。

この作品には、Ｎさんが見たものがなんだったのか、あるいは何も見なかったのに見たと感じているだけなのか、その点もはっきりとは書かれていません。しかし一つだけいえるのは、Ｎさんが清太郎を見たと感じたことは確かであり、そこにはＮさんの清太郎への思いが表れているということです。Ｎさんが清太郎を好きだったこと、その清太郎は病で床に就いていること、母親からは大事にされていないこと、それらの状況の全てが、Ｎさんに清太郎の顔を見せたのだと考えると、〈見ること〉にはある人への思いの強さが関係していると言えるでしょう。私たちが何かを別のものと見まちがえる時、それは単なる間違いではなく、何か私たちの心の思いが反映されているのかもしれない。存在しないものを見てしまう時、そこにはそれを見たいという私たちの欲望が反映されているのかもしれない。そんなことを考えさせる作品です。

二つ目の作品は、堀辰雄の「窓」です。この作品は「春の夜」とは異なり、終始一貫して「私」の視点から物語が語られます。冒頭で「私」は目が不自由になったＯ夫人の別荘を訪れますが、この別荘は沼によって「町から完全に隔離」されています。そしてその別荘に辿り着くには、沼を迂回しなければならず、建物は見えているのになかなかたどり着けません。さらに別荘は一面が蔦に覆われ、窓もないように見えます。冒頭の描写から、この別荘が外界から遮断された、ある種の特殊な空間であることが暗示されています。

「私」がこの別荘に訪れた理由は、Ｏ夫人が所有する、「私」の恩師Ａ氏の晩年の絵画作品の「窓」を遺作展覧会のために貸し出してもらうためでした。とはいえ、「私」は夫人が「私」に面会してくれることさえ、難しいと考えています。Ａ氏の「窓」を貸してもらいたい「私」は、過剰なほど夫人に気に入られようとし、Ａ氏の秘密まで話してしまいます。「私」は夫人がＡ氏に非常に好奇心を抱いていること、そして「私」のことも気に入ってくれたことを察し、絵画作品「窓」へと話題を転じることに成功します。この点の「私」の執着心が、後の不思議な〈見ること〉へと繋がっている点に注目できると良いですね。

この後に物語の展開があるのですが、自分が所有する「窓」についてＯ夫人は「私」に、人々はあの絵をもう本物とは受け取ってくれるまい、なぜならあの絵は、それが数年前に持っていたとおりの姿を持っていないからだという奇妙な打ち明け話をします。さらに夫人は「私」にその絵を見せることを決意し、「私がまだこんなに眼の悪くなかった数年前にそれを見た時と、この絵がどんなに変っているかを、私はただ私の心で感じているのに過ぎません。」という、やはり奇妙なことを言います。目が不自由な夫人が、なぜ絵画作品の姿が変わってしまったことがわかるのか、「私」が怪訝に思ったのも無理はありません。

その後夫人は「私」に作品を見せるのですが、「私」はこの「窓」という絵画作品を「文字通り、そのうす暗い場所にひらかれている唯一の「窓」であった！」と思います。この箇所を、冒頭の別荘の描写と重ねて読むことができれば、創作へのヒントを得られるかもしれません。沼によって町から隔離され、建物自体も蔦に覆われて窓も見えなかった別荘の内部空間。そこに「窓」というタイトルの絵が書けられていて、その絵がタイトル通り外界に開かれる唯一の「窓」として機能する。ここは読みどころで、様々な可能性を感じさせてくれる部分です。

しかしこれだけでは終わりません。さらに不思議なことに、「私」はこの「窓」にＡ氏の

顔が浮かび上がっているのを見ます。ここもこの作品の面白い点なのですが、目の不自由なO夫人が心で感じた絵の変化を、「私」は実際に視覚として見ることが出来ています。「私」はA氏が夫人を深く愛しており、夫人もそれを受け入れていたのではないか、と考えますが、この絵画は「私」とA氏、「私」と夫人とを繋げています。A氏と夫人が愛しあっていたから、この絵の不思議な現象が夫人には見えたのだと考えられることはもちろんですが、「私」にも同じものが見えたということ、ここに〈見ること〉の不思議な可能性が読み取れるのではないでしょうか。

二作品の共通点としては、〈見ること〉が人の思い、人と人との関わりによって生じているという点です。それにより、不思議で奇妙な〈見ること〉に遭遇してしまう人の物語が描かれていることに着目し、創作するときにはぜひ、それを活かしていただければと思います。

またこの二つの課題文は、それぞれの作品構造が異なります。「春の夜」が「僕」が他の人物から聞いた話を語っているのに対し、「窓」は実際に「私」が経験したことを語っています。どちらの構造を使っても、作品としては成立すると思いますが、そうした構造も意識できると良いと思います。

この課題では自由な創作を求めています。ただし、あくまでも課題文の作品世界を理解した上で、創作していただきたいと思います。課題文にはたくさんの創作のヒントが隠されています。それらをいかに読み取って、独自の世界と繋げていくかが大切です。それぞれの作品世界を自らの創作を限定するものではなく、むしろ広げるものとして、上手に活かしてくれることを期待しました。

［タイプ2　解答例］

（1）

兼好法師の著作。生没年は不明であるが、建治・弘安年間頃（1275〜88）の生まれか。二条為世門下の歌人として活躍し、家集『兼好法師集』がある。出自や経歴など不明な点が多い。歌僧、正徹（1381〜1459）の『正徹物語』七四段が最も古いまとまった伝記で、そこでは兼好は「滝口（禁中警護の武士）」として内裏に出入り、後宇多院の崩御にさいして遁世したとされる。

随筆文学として、清少納言の『枕草紙』とともに著名。書名は序段の「つれづれなるままに」による。数段階の執筆過程を経て鎌倉末期頃から南北朝期にかけて成立か。現行の序段と二四三段の章段構成は、近世前期に刊行された『徒然草諸抄大成』に基づく。遁世者や歌人としての位相で、無常の理を繰り返し説き、自然観や美意識について強いこだわりを見せる。また有識故実に詳しく、教訓・処世術についても熱心に説き、人間・社会への鋭い観察など、話題は多岐にわたる。近世期以降に広く読まれるようになり、現代まで400年間にわたり、多くの読者を得て、今もなお読み継がれている優れた古典作品として知られる。

（四五〇字）

（2）

＊問題を提示した際に例示したものと同じです。解答例で取り上げられている話題（テーマ）は一つのみですが、実際の解答では［課題］にある通り、一つの話題（テーマ）につき一〇〇〇字程度を目安に、二つを選んでまとめてください。

怪異について

わたしは、『徒然草』で描かれる怪異への視点について興味を持った。

怪異にまつわる話題で特に印象的な章段は、第五〇段、第八九段、第二〇七段、第二三〇段であろう。それぞれ鬼・猫また・蛇・化け狐がとりあげられている。説話文学では、人の脅威となる怪異として扱われ、社会に災いをもたらし、その結果、神仏や僧によって調伏（ちょうぶく）されてきたものたちである。しかし『徒然草』に掲載されるのは、このような超自然的な霊鬼が跋扈（ばっこ）するおぞましい怪異譚や、神仏によって制圧、退治される霊験譚といった中世では

ありがちな話ではなく、怪異の正体を見極め、冷静に分析しようとする人の理性や知恵にかかわる話だ。

例えば第五〇段では、「伊勢国より、女の鬼になりたるを率てのぼりたり」と、都にやってきた鬼女のことを取り上げ、人々が大勢、鬼女見物に押し掛けるが、噂はあちこちに残るものの、鬼を直接見たものは誰一人としていなかったといった話題を取り上げていて、怪異現象の正体が、群衆心理による噂やデマによって形成されているという点を問題にしているようだ。また本章段では末尾に、その後、病気にかかる人が出てきたことから「鬼のそらごとは、このしるしを示す」といった見解を示す人の意見を書きとどめていることも留意されよう。このような現象は、当時、不吉な物事の前触れのようにも扱われ、兼好はそのような別の角度からの見方も紹介している。現在のわたしたちの社会では、風邪流行の原因には、人々の密集による病原菌の伝染があるといった科学的知見がある。当時、病原菌が感染するといったことはもちろん知られていない。兼好が、鬼出現の怪異を伝染病流行と結びつけた点には、そこに人々の密集が関係しているという発想こそない。しかし、より現実的な認識へと踏み出そうとしているのではないだろうか。

『徒然草』が取り扱う怪異とは、実体の伴わない、たわいもない現象であったり、噂にすぎないといった種明かし譚が目立つ。第八九段の「猫また」の怪異もよく見たら、足元にじゃれ付いてきたのは自分が飼っていた犬であった話など、江戸時代の俳人、横井也有の「化け物の正体見たり枯れ尾花」といった句と似た合理性を持つ話となっている。人を食らう妖怪、猫または恐怖よりもその種明かしの方に重点が置かれている。兼好という人は、祟りや怪異が闊歩（かっぽ）する中世期においてとても理性的な知識人であったことがわかる。

（一〇〇八字）

〈参考図書一覧〉

○永積安明校注・訳『徒然草』（新編日本古典文学全集４４・小学館・一九九五年三月）

○小川剛生訳注『新版　徒然草　現代語訳付き』（角川ソフィア文庫・二〇一五年三月）

〈参考サイト一覧〉

○「国際日本文化研究センター　怪異・妖怪伝承データベース」

https://www.nichibun.ac.jp/Youkai DB/　最終閲覧日二〇二五年八月四日

（試験を終えて気が付いた点）

『徒然草』は、序段と二四三段に分かれて構成されていて、文体もそこまで難解ではありませんので、古典作品の中では取り組みやすかったのではないでしょうか。注釈書を手掛かりに読み解いていくと書いてあることはとりあえず理解できたように思われたことでしょう。タイプ2を選択した受験者は例年よりかなり多かったです。兼好法師の話題も多岐にわたり、その中には現在では馴染みが薄いものもありますが、美意識の問題や自然観、また人間や社会観察の章段など比較的、理解しやすい話題もあったかと思われます。

提出された課題レポートを見ると、まず「無常」について書かれたものが多く、自然の美の在り方をテーマに選んだ人も散見されました。個性的な章段にチャレンジするよりも、『徒然草』を代表するようなよく知られた章段に受験者の関心が集中していました。

そのためか、課題作文がやや抽象的で、また似たような内容が見られるといった点が見受けられ、個々の興味に基づいたテーマがもっと出てきてもよかったと思いました。最も多かったテーマである「無常」についてですが、このことばは実は難しく、思想的ですので、話が広げられない、深化させることができず、選んではみたもののかなり苦労している印象を受けました。

なお基本的な注意事項ですが、まず〔課題〕を繰り返し読んで何を問われているのかをしっかり理解してから進めてください。〔注意点〕に重要なことが書かれていますので、読み飛ばすことなく、指示に従ってください。表紙を付ける、段落の付け方、誤字脱字や句読点の付け方といった書式や文章の書き方も評価の対象ですので、そのような日本語の文章を書く上での基礎的なところにも十分に気を付けて丁寧に書く必要があります。